# 「講義要綱」における漢字表記の本語について

POPESCU Florin

## 一．はじめに

「講義要綱」と呼ばれるキリシタン写本には、ラテン語で書かれた「Compendium Catholicæ Veritatis」（以下は「ラテン語版」と略称する）と、その和訳（以下は「日本語版」と略称する）がある。「ラテン語版」は 1593（文禄二）年頃にイエズス会の副管区長ペロ・ゴメスによって編纂され、「日本語版」は 1595（文禄四）年の初め頃に書かれたと思われる。拙稿「「講義要綱」の成立について」(1) において、両版は原本ではないが、比較的に早い時期に書写された写本であることを指摘した。

「講義要綱」にある本語はローマ字表記、仮名表記、合字表記と漢字表記のものの四種類の表記によって表記されている。これらの本語の全例数を合計すると約２万語となる。それぞれの異なり語数と延べ語数を表１にあげる。

表１

| 種類 | 異なり語数 | 延べ語数 |
|---|---|---|
| ローマ字表記 | 580 | 759 |
| 仮名表記 | 2201 | 14643 |
| 合字 | 20 | 3637 |
| 漢字表記 | 24 | 1233 |
| 合計 | 2825 | 20272 |

本稿では、第四種類の漢字本語について考察する。

## 二．漢字本語

「講義要綱」で漢字表記された言葉は表２に示してある。原語のどの言葉に該当するかは、前後文脈を併せて考え、「ラテン語版」と比較して確認した。

例：六番ニハ三番ノコスタンチノホリタアノ也。御世ヨリ六百九十一年也。ヒスホノ数ハ二百二十九人也。pp ハ二番メノ李案ニテ在マス也。(「日本語版」、126 オ)

6ª Synodus Gen. est conciliũ 3m Constant incoatum sub Agatone pp & Cõnstino 4º & finitum sub Leone 2º, Anno Dni 691. cõuemrunt in eã 229 episco (175r)　(六番目の総合教議会は、コンスタンチノポレ(で行われた)三番目で、アガトヌス教皇とコンスタンチヌス四世の下で始まり、西暦 691 年にレオン二世の下で終わった。司教 229 人がこれにおいて会合した)。

「日本語版」の「御世」は「御出世」から「出」が脱落したもので、「西暦」の意味である。「ラテン語版」の記述には、公会議がどの教皇の統治下で始まったという部分は省かれているが、「二番メノ李案」は「ラテン語版」の「Leon 2º」に該当することが分かる。人名 Leon はスペイン語ではラテン語と同じ形、ポルトガル語では Lião となる。したがって、漢字名「李案」はポルトガル語の発音に当たることになる。

漢字の読み方に関しては、仮名表記の例があるとき、それらの例を当てたが、ないときは、原語の綴りから推定した。表２では、推定した読み方を () に入れた。そして綴りによってもとの言語について判断した。

表２

| 番号 | 漢字 | 例数 | 原語 | 仮名 (推定) | 原語 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 阿馬蘭 | 6 | Abraham | アバラン | ポ |
| 2 | 阿檀 | 8 | Adam | アダン | 共通 |
| 3 | 恵実士 | 8 | Egipto | (エジット) | ポ |
| 4 | 闍香部 | 4 | Jacob | ジヤコウブ | 共通 |
| 5 | 是婁座連 | 8 | Jerusalem | ゼルザレン | ポ |
| 6 | 如誓夫 | 3 | Joseph | (ジョセイフ) | ポ |
| 7 | 汁駄子 | 3 | Judas | ジユウダス | 共通 |
|  | 什駄子 | 9 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 8 | 需天阿 | 1 | Judeea | (ジュデア) | 共通 |
| 9 | 需天与 | 72 | Judeo | (ジュデヨ) | ポ |
| 10 | 李案 | 2 | Liam | リアン | ポ |
| 11 | 梅是子 | 20 | Moises | (モイゼス) | 共通 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 12 | 野恵 | 1 | Noe | ノエ | 共通 |
| 13 | 朗广 | 12 | Roma | ロウマ | 共通 |
| | 朗マ | 2 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 14 | 朗广那 | 1 | Romana | ロウマナ | 共通 |
| 15 | 阿尔摩 | 5 | anima | アニマ | ラ |
| | 阿尔广 | 120 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 16 | 安如 | 195 | anjo | アンジョ | ポ |
| | 案如 | 1 | 〃 | 〃 | 〃 |
| | 安女 | 7 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 17 | 恵化連闍 | 427 | ecclesia | エケレジア | ラ |
| 18 | 縁天治面度 | 111 | entendimento | エンテンヂメント | ポ |
| 19 | 波羅王 | 1 | farao | （ハラワウ） | 共通 |
| 20 | 前痴与 | 102 | gentio | ゼンチヨ | ポ |
| 21 | 悟朗利阿 | 92 | gloria | ゴロウリア | 共通 |
| 22 | 伊留満 | 2 | irman | イルマン | ポ |
| 23 | 伴天連 | 3 | Padre | （パデレ） | ポ |
| 24 | 羅志与那留 | 8 | racional | ラシヨナル | ポ |
| 合計 | | 1234 | | | |

表２には使用されている漢字による異形も示してあるが、比較的少ないことが分かる。

これらの本語をもとの言語から見ると、「アニマ」と「エケレジア」以外は、すべてがポルトガル語、もしくはポルトガル語・ラテン語共通の綴りに基づいていることが分かる。

### 二・1　表記ともとの綴り・発音との関係

使用されている漢字を見ると、「恵」、「留」、「連」などのように、平仮名もしくは変体仮名のもとになった文字があるが、「闍」などそうでないものもかなりある。

表２にある漢字の読み方に関しては、「天」が 8、9 と 23 ではポルトガル語の「de」（デ）に当たるが、18 では「テン」と読むべきであろう。また、「安如」（アンジョ）に出てくる「安」や「伊留満」（イルマン）に出てくる「満」

などは「あ」、「ま」などの仮名となっておらず、漢字音を利用している。

「連」は「是斐座連」ではおそらく「レン」と読まれたが、「伴天連」や「恵化連闍」は「レ」と読むべきであろう。

「梅是子」は、原語に該当する言葉は Moises で、発音から推定される仮名表記は「モイゼス」である。「梅」に「モイ」の音がないので、「マイ」と読んだのであろうが、「マイゼス」と読ませるのなら原語の発音とはかなり異なっていただろう。

拙稿「「講義要綱」における仮名書き本語について」[(2)] において、仮名表記で原語のアクセントが長音によって反映されているという結論に至った。表2の漢字本語を見ると、アクセントのある音節が長音になるように漢字が選ばれている場合があることが分かる。

例：悟朗利阿　（ゴラウリア）　< glória（栄光）

　　波羅王　　（ハラワウ）　< faraó（エジプトの皇帝）

ただし、原語のアクセントと長音の位置が異なる例もある。

項目4の「闍香部」（ジャコウベ）の場合、ポルトガル語のアクセントはJácobと第一音節にあって、漢字表記の長音の位置から推定される第二音節とは異なっている。13の「朗广」をラウマと読むと、原語Romaのアクセント母音と長音の位置とが一致するが、14の「朗广那」（Romána、ローマの）では原語のアクセントは二音節目にある。

つまり、これらの漢字本語は漢字の読み方から推定される綴りも、発音も原語のものと異なる形があり、またアクセントがおかれていない音節が長音になっている場合がある。これらの漢字本語を読んで理解するためには、まず漢字の読み方の知識をもたなければならず、さらに概念の意味を熟知していなければならない。このことからだけでも、「講義要綱」がいかに幅の狭い読者層のためのものか想像できる。

筆記者の立場から見ると、漢字本語は筆記するにあたって仮名より余分な労力を必要とする。筆記者はこれらの漢字表記を特別に意図して用いたに違いない。

### 二・2　漢字本語の省略表記について

拙稿「「講義要綱」における仮名書き本語について」(p.10)[(3)] において、仮

名表記の本語には省略表記が見られることを指摘した。漢字本語の場合にも、省略表記の例がある。省略表記の有無について表3に示した。

表3

| 番号 | 漢字 | 例数 | 省略表記 | 完全表記例数 | 省略例数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 阿檀 | 2 | なし | 6 | / |
| 2 | 安如 | 2 | なし | 203 | / |
| 3 | 野恵 | 2 | なし | 1 | / |
| 4 | 李案 | 2 | なし | 2 | / |
| 5 | 朗广 | 2 | なし | 14 | / |
| 6 | 阿尓摩 | 3 | なし | 125 | / |
| 7 | 伊留満 | 3 | なし | 2 | / |
| 8 | 恵実土 | 3 | なし | 8 | / |
| 9 | 需天阿 | 3 | なし | 1 | / |
| 10 | 如誓夫 | 3 | なし | 3 | / |
| 11 | 波羅王 | 3 | なし | 1 | / |
| 12 | 梅是子 | 3 | なし | 20 | / |
| 13 | 伴天連 | 3 | なし | 3 | / |
| 14 | 朗广那 | 3 | なし | 1 | / |
| 15 | 闍香部 | 3 | なし | 4 | / |
| 16 | 需天与 | 3 | 需—— | 45 | 27 |
| 17 | 阿馬蘭 | 3 | 阿馬—— | 5 | 1 |
| 18 | 汁駄子 | 3 | 汁駄 | 11 | 1 |
| 19 | 前痴与 | 3 | 前—— | 101 | 1 |
| 20 | 恵化連闍 | 4 | 恵——<br>恵化——<br>恵化——連闍 | 10 | 1<br>415<br>1 |
| 21 | 悟朗利阿 | 4 | 悟——<br>悟朗—— | 2 | 2<br>88 |
| 22 | 是婁座連 | 4 | 是婁——<br>是婁座—— | 5 | 2<br>1 |
| 23 | 縁天治面度 | 5 | 縁天——<br>縁天治—— | 1 | 33<br>78 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 24 | 羅志与那留 | 5 | なし | 8 | / |

表 3 の第 18 項目の「汁駄子」に対する「汁駄」は、一例しかない上、省略を示す棒線が付いていないため、省略と見るより、「子」の脱落と見た方が適当であろう。第 20 項目にある「恵化——連闍」は、棒線の下に語末「連闍」が書いてある。おそらく、筆記者がいったん省略表記しておこうとしたが、筆記しているうちにそれをやめて下に文字を補っているのであろう。

第 24 項目「ラシヨナル」以外は、四文字以上の語の場合に必ず省略表記の例がある事が分かる。省略を示す棒線を除くと、一文字省略されている異なり語が 4 語（延べ 31 例）、二文字省略されている異なり語が 5 語（延べ 537 例）、三文字省略されている語は 2 語（延べ 79 例）ある。四，五文字で省略されていない語はそれぞれ異なり語 3 語（18 例）と、異なり語 2 語（9 例）ある。

つまり、省略表記に関しては、例外は少しあるものの、二文字の短い語はだいたい省略されず、四文字以上の長い語はだいたい省略され、三文字の語は、省略されない例と省略される例の比率が近い。

## 二・3　漢字で表記されている本語の他の表記例

表 4 では、漢字で表記されることがある本語が他の表記法をもって出てくる例を示した。

表 4

| 漢字 | 例数 | 品詞 | 仮名 | 仮名表記例数 | ローマ字と合字（例数） | 概念の由来 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 恵実土 | 8 | 地名 | 無 | / | | 旧約聖書 |
| 波羅王 | 1 | 名詞 | 無 | / | | 旧約聖書 |
| 梅是子 | 20 | 人名 | 無 | / | | 旧約聖書 |
| 悟朗利阿 | 92 | 名詞 | 無 | / | | 旧約聖書 |
| 需天阿 | 1 | 地名 | 無 | / | | 旧約聖書 |
| 需天与 | 72 | 名詞 | 無 | / | | 旧約聖書 |
| 如誓夫 | 3 | 人名 | 無 | / | | 旧約聖書 |
| 安如 | 203 | 名詞 | 無 | / | | 旧約聖書 |
| 伊留満 | 2 | 名詞 | 無 | / | | 旧約聖書 |
| 朗广 | 14 | 地名 | 無 | / | | 旧約聖書 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 野恵 | 1 | 人名 | ノエ | 1 | | 旧約聖書 |
| 闍香部 | 4 | 人名 | ジヤコウブ<br>ジヤコウベ | 2 | Jacob （1） | 旧約聖書 |
| 汁駄子 | 11 | 人名 | ジユウダ | 2 | | 旧約聖書 |
| 前痴与 | 102 | 名詞 | ゼンチヨ | 2 | | 旧約聖書 |
| 是婁座連 | 8 | 地名 | ゼルザレン | 4 | | 旧約聖書 |
| 李案 | 2 | 人名 | （サン）リアン | 4 | | 一般 |
| 朗广那 | 1 | 形容詞 | ロウマナ | 6 | | 一般 |
| 阿馬蘭 | 6 | 人名 | アバラン<br>アハラハン | 21<br>1 | | 旧約聖書 |
| 恵化連闍 | 427 | 名詞 | エケレジア | 33 | | 神学書 |
| 縁天治面度 | 111 | 名詞 | エンテンヂメント | 79 | | 神学書(一般) |
| 羅志与那留 | 8 | 形容詞 | ラシヨナル | 102 | | 神学書 |
| 阿檀 | 6 | 人名 | アタン | 134 | | 旧約聖書 |
| 伴天連 | 3 | 名詞 | 無 | / | Pe （140） | 一般 |
| 阿尓广 | 125 | 名詞 | アニマ | 515 | | 神学書 |

漢字表記が出てくる全 24 種類のうちに、「朗广」までの 11 種類の場合、他の表記法の例が出てこず、さらに「野恵」から「朗广那」までの 7 種類の場合仮名表記の例はあるが、数例ずつと非常に少ない。残りの 7 種類では、「伴天連」の場合は合字表記例が混在している。

形態論上分類すると、形容詞の「ラシヨナル」と「ロウマナ」との２種類以外、すべての語は名詞である。そのうち、「ハラワウ」、「パアデレ」、「イルマン」が一般名詞、「アニマ」、「アンジョ」、「エケレジア」、「エンテンヂメント」が抽象名詞、残りの名詞は、人名、地名、国民名の固有名詞である。

漢字本語で示されている概念の由来について検討する。固有名詞に関しては、国民名、教皇の名前「李案」以外のすべての人名、そして「朗广」以外のすべての地名は旧約聖書、または福音書に出てくるものである。このうち、旧訳聖書における重要人物名がある。一般名詞である「波羅王」もエジプトの帝王で、旧約聖書のたとえ話が用いられている場面に出てくる。

「需天与」（ジュデヨ－ユダヤ人）と「前痴与」（ゼンチヨ－元々ユダヤ人で

ない者、ひいてはキリスト教でない者）は聖書全体に頻出する言葉であるが、「講義要綱」の書かれた当時にも多用されている概念である。

「アニマ」、「エンテンヂメント」、「ゴロウリア」などに関しては、キリスト教の神学的概念である。

他表記の混在の有無と、概念の由来を関連づけて考えてみると、旧約聖書や福音書に出てくる概念の漢字本語はだいたい他の表記法によって示されることがないか、或いはあるとしても例数が少ない（「アダン」が例外）。聖書と直接の関係がない漢字本語には、仮名表記や合字表記の例が混在し、ものによってその例数が漢字表記の例数を上回る。

以下は、漢字本語が存在する他の資料を調査してゆく。

### 三. 他のキリシタン資料に見られる漢字本語

#### 三・1　教義書に見られる漢字本語

印刷機がヴァリニャーノ巡察師によって日本に持ち込まれて、キリシタン版が出始めた 1590（天正一八）年以降、ローマ字版本とともに、国字版本も出版されていく。しかし、国字版本の本語は仮名表記しかされず、漢字本語は一切見られない。

ところが、1586（天正一四）年リスボア刊ラテン語文のヴァリニャーノ著「Catechismvs Christianæ」[4]の表紙を見ると、装飾用の挿し絵の右には「世主子」、左には「満理阿」と書いてあるのである。それらの六字は西洋の読者にとって単なる飾りに過ぎず、東洋的なイメージを作り出すのに用いられただけかもしれないが、当時本語を漢字で表記する習慣が存在していたことの証拠である。

「Catechismvs Christianæ」の訳文は、「日本のカテキスモ」と通称され、1581（天正九）年の間に成立したとされる[5]。この作品における漢字の本語は表５に示した（松田毅一「屏風文書の研究」による）。

以下の表において、それぞれの書物に仮名表記がある場合、その仮名表記をあげたが、仮名表記の例がない場合には、本語の形と漢字を考慮して推定される仮名表記を（）に入れて示した。なお、推定しづらい例には「?」を付してある。

表５

| 語 | 例数 | 仮名（推定） | 例数 | 原語における綴り |
|---|---|---|---|---|
| 縁天―― | 2 | エンテー | 1+1? | entendimento |
| 朗磨 | 1 | （ロウマ） | 0 | Roma |
| 阿一 | 1 | アダン<br>アタン | 4<br>2 | Adam |
| 恵一 | 1 | エワ | 3+1? | Eva |
| 悟朗一<br>悟朗利也 | 1<br>1 | ゴロウリヤ | 6 | gloria<br>gloria |
| 安如 | 2 | アンショ | 11 | anjo |
| 需天―― | 1 | シュテヨ | 2 | Judeo |
| 前痴与 | 1 | （ゼンチヨ） | 0 | gentio |

松田毅一「屏風文書の研究」によると、「日本のカテキスモ」の和訳と同じ屏風の下張りに、オルガンティーノ師著とされる「人満心得ノ事」も発見された。その成立は不詳であるが、発見された屏風は1580年代にヨーロッパにわたったと同書で言われている。オルガンチーノ師が来日したのは1570年後半なので、「人満心得ノ事」の成立は1570年代後半から1580年代のものであると考えられる。「人満心得ノ事」に出てくる漢字の本語は表６のようにある（同じく「屏風文書の研究」による）。

表６

| 語 | 例数 | 仮名（推定） | 例数 | ローマ字 | 例数 | 原語における綴り |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 悟朗一 | 1 | （ゴロウリア | 0 | 無 | 0 | gloria |
| 部阿度 | 1 | （ベアト） | 0 | 無 | 0 | beato |
| 入満 | 2 | イルマン | 4 | 無 | 0 | irman |
| 恵化一 | 7 | エケレシア<br>エケー | 6<br>1 | ygressa? | 1 | ecclesia |
| 恵須一 | 1 | エスキー | 2 | 無 | 0 | escriptura |

上記の二作品は、当時の神学の概念を紹介している教義書であるという面で、「日本語版」にもっとも近い性格のものである。

ファビアン不干斎の 1605（慶長一〇）年の著「妙貞問答」に出てくる漢字本語を表 7 に示した。

表 7

| 漢字表記 | 例数 | 仮名（推定） | 例数 | ローマ字綴り |
|---|---|---|---|---|
| 亜非利加 | 1 | アヒリカ | 1 | Africa |
| 阿檀 | 5 | （アダン） | 0 | Adam |
| 安如 | 5 | （アンジョ） | 0 | Anjo |
| 貴理志端 | 53 | キリシタン | 2 | Christão |
| 恵和 | 4 | （エワ） | 0 | Eva |
| 賛労冷祖 | 1 | サンロレイソ） | 0 | San Loreiço |
| 錫狼 | 1 | （セイラウ） | 0 | Ceylon? |
| 巴鼻庵 | 1 | （ハビアン） | 0 | Fabian |
| 朗磨 | 1 | （ロウマ） | 0 | Roma |

1620（元和六）年に同じくファビアンが著したキリシタン批判の著作「破提宇子」に出てくる漢字本語を表 8 にまとめた。

表 8

| 漢字 | 例数 | 合字 | 例数 | 仮名（推定） | 例数 | ローマ字綴り |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 阿檀 | 2 | / | 0 | アダン | 12 | Adam |
| 安女 | 8 | / | 0 | アンジヨ | 1 | Anjo |
| 慧和 | 2 | / | 0 | （エイワ） | 12 | Eva |
| 提宇子 | 50 | Ds | 63 | （デウス） | 0 | Deus |
| 伴天連 | 19 | / | 0 | （パアテレ） | 0 | Padre |
| 呂宋 | 2 | / | 0 | （ルソウ） | 0 | Luçon |

ペロ・ゴメスの小冊子の翻訳であると推定される「丸血留の道」は 1612（慶長一七）年以降に成立したと言われる(6)が、本語の表記には漢字、仮名そしてローマ字の合字が複雑に混じり合っている。表 9 では、同書にある漢字表記本語を示した。「仮名（推定）」では、「丸血留の道」に漢字表記の語に該当すると思われる仮名表記がある場合、それらを入れたが、このような例がない場合、推定仮名表記を () に入れた。

表 9

| 漢字 | 例数 | 仮名（推定） | 例数 | 推定ローマ字綴り |
|---|---|---|---|---|
| Ｓ・安デレ・アポウストロ | 1 | （サン・アンデレ・アポウストロ） | 0 | S. Andre Apostolo |
| Ｓ・安当ニヨ<br>Ｓ・安当ニヨ・デ・パヅア | 1<br>1 | （サン・アンタウニヨ） | 0 | S. Antonio<br>S. Antonio de Padua |
| Ｓ・理庵 | 1 | （サン・リアン） | 0 | S. Liam |
| Ｓ・エステ庵<br>サン・エステ庵 | | （サン・エステアン） | 1<br>1 | S. Esteuão<br>〃 |
| Ｓ・如庵バウチシタ | 5 | （サン・ジョアンバウチシタ） | 0 | S.João Bautista |
| アブ乱 | 1 | アバラン<br>アブラン<br>St・アブラン | 1<br>1<br>1 | Abraham<br>〃<br>St. Abraham |
| コンシ円シヤ | 1 | コンシエンシヤ | 2 | consciencia |
| コンヘソレ数 | 1 | （コンヘソレス） | 0 | confesores |
| サン・ケレ免テ | 1 | （サン・ケレメンテ） | 0 | San Clemente |
| サン丸チイノ<br>丸チイノ | 2<br>1 | （サン・マルチイノ）<br>（マルチイノ） | 0<br>0 | San Martino<br>Martino |
| ゼ順 | 1 | （ゼジュン） | 0 | jejun |
| ド当留<br>ド当レス | 1<br>1 | （ドトウル）<br>（ドトウレス） | 0<br>0 | doutor<br>doutores |
| プルガ当理与 | 1 | プルガトウリヨ | 1 | purgatorio |
| 安如 | 20 | （アンジョ） | 0 | anjo |
| 陰ヘルノ | 22 | （インヘルノ） | 0 | inferno |
| 縁天ヂメント | 1 | （エンテンヂメント） | 0 | entendimento |
| 丸血留<br>丸血ル<br>丸血レス<br>丸血礼子<br>丸血礼数 | 49<br>1<br>1<br>2<br>34 | （マルチル）<br><br>マルチレス | | martyr<br>〃<br>martyres<br>〃<br>〃 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 丸血礼ス | 1 | | | 〃 |
| 丸血理与 | 1 | (マルチリヨ) | 0 | martyrio |
| 苦留子 | 4 | クルス | 7 | crus |
| 恵化礼ジャ<br>恵化――<br>恵化―スチコ | 1<br>7<br>1 | (エケレジヤ)<br>(エケレジヤ)<br>(エケレジヤスチコ) | 0 | Ecclesia<br>〃<br>Ecclesiastico |
| 恵労デス | 1 | (エラウデス) | 0 | Herodes |
| 穴ニヤ | 1 | (アナニヤ) | 0 | Anania |
| 広ゾホ | 1 | (ヒロゾホ) | 0 | philosopho |
| 需天与等<br>需――等<br>需天与 | 3<br>2<br>2 | (ジュデヨ) | 0 | judeos<br>〃<br>judeo |
| 前知与 | 16 | (ゼンチヨ) | 0 | gentio |
| 天シヤ | 1 | (テンシヤ) | 0 | (peni)tencia?? |
| 天多サン | 1 | (テンタサン) | 0 | tentação |
| 如庵 | 1 | (ジョアン) | 0 | João |
| 留志ヘル | 1 | (ルシヘル) | 0 | Lucifer |

1790（寛政二）年、寛政のキリシタン露見の間に没収された書物の内に、写本の「こんちりさん・の・りやく」と「天地之始ノ事」があったらしく、それらは 1901（明治三四）年に村上直二郎氏によって転写されたあと行方不明になったそうである(7)。

「こんちりさん・の・りやく」の巻頭には、「御出世以来千六百三歳」と書かれている。その転写本をみると、片仮名で書かれている 1600 年前後の写本と異なって、平仮名で表記されているのが特徴である。本語の表記に用いられる漢字の異なり語は三語のみで、全用例で一〇例に及ばない。

さんた丸や：おそらくサンタマリヤ（Santa Maria　ラ・ポ共通）の表記。

おらつ所　：おそらく oratio（ラ）の表記。

ぱつ所：おそらく passio（ラ）の表記。

また、「天地之始ノ事」は、本語の崩れや支離滅裂な記述内容から、時代の大分下ったものであることが分かる。たとえば、イスラエル王 Herodes（推定仮名表記はエロウデス）は「よろう鉄」になっている。また、形容詞 Sanctissima

(「講義要綱」の仮名表記ではサンチイシマ［(ラ) もっとも貴い］) は「三ちい島」となって地名として扱われているようである。この状態から、転写あるいは何回かの口頭伝承を経ているのではないかと考えられる。表 10 の「仮名（推定)」という項目では、「丸血留の道」に漢字表記の語に該当すると思われる仮名表記がある場合それらを入れ、このような例がない場合、推定仮名表記を () に入れた。

表 10 「天地之始ノ事」における漢字本語

| 漢字 | 例数 | 仮名（推定) | 例数 | ローマ字綴り |
|---|---|---|---|---|
| おらつ所<br>御らつ所 | 5<br>5 | （オラッショ) | 0 | Oratio |
| 安所 | 1 | あんじよ | 3 | anjo |
| 丸や | 27 | （マルヤ) | 0 | Maria |
| 羅尊 | 1 | （ルソン) | 0 | Luzon |
| じゆず・きり人 | 1 | （ジユズ・キリヒト) | 0 | Jesus Christo |
| よろう鉄 | 2 | （ヨロウテツ) | 0 | Herodes |
| 十だつ | 7 | （ジュウダツ) | 0 | Judas |
| かるわ竜（ヶ嶽) | 2 | （カルワリヨウ）ヶ嶽 | 0 | (Monte) Calvario |
| 三みぎり<br>三ぺいとろ<br>三ぱうろ<br>三じゆわん<br>三とうす<br>三ちい島<br>三た・えきれじや<br>三た・丸や | 2<br>1<br>1<br>1<br>2<br>2<br>5<br>2 | （サンミギリ)<br>（サンペイトロ)<br>（サンパウロ)<br>（サンジユワン)<br>（サントウス)<br>（サンチイシマ)<br>（サンタ）エケレジヤ<br>（サンタマルヤ) | 0<br>0<br>0<br>0<br>0<br>0<br>1<br>0 | San Miguel<br>San Petro<br>San Paulo<br>San Joan<br>Sanctos<br>Sanctissima<br>Santa Ecclesia<br>Santa Maria |

1636（寛永一三）年に、元ポルトガル人司祭クリストバン・フェレイラがキリスト教を棄教して忠庵という日本名で表した「顕偽録」に出てくる漢字本語は、「鬼利志端」と「罰天連」の二語のみである。それらの漢字の選び方にはキリシタンを誹謗する意図が明らかに出ている。

以上管見に入ったキリシタン教義書国字写本は現存するほぼすべてのもので

あろうと思われるが、漢字本語が必ず出てくることが一つの共通点である。特に「日本語版」と成立が近い「日本のカテキスモ」と「入満心得ノ事」において共通する言葉が多く、表記の揺れも少ない。

### 三・2　書簡に見られる漢字本語

漢字本語が見出せる他の資料には、日本語を表記した書簡がある。現存しているキリシタン関係の書簡は殆どヨーロッパの図書館に所蔵されているが、1587（天正一五）年の秀吉の有名な「伴天連追放令」など、当時の日本の文書の中に、漢字本語が使われているものがある。

村上直二郎氏「キリシタン研究の回顧」によると、1899（明治三二）年に村上直二郎氏はローマのバルベリニ図書館で五通の書簡を発見されたという[(8)]。それらの書簡は伊達政宗遣欧使節が教皇に送り届けたものと見られており、ラテン語の訳文もついているという。これらの五通の書簡に出てくる漢字本語を表 11~15 に示した。

表 11　有馬領のキリシタンの書簡（元和六年九月二三日）

| 漢字 | 例数 | 原語 | 仮名（推定） |
|---|---|---|---|
| へるせき散 | 2 | perseguição | へるせきさん |
| 賀良佐 | 1 | graça | （ガラサ） |
| 貴理師端<br>貴理志丹 | 1<br>1 | christão | （キリシタン） |
| 貴理師度 | 2 | Christo | （キリシト） |
| 讃多恵化連舎 | 3 | Santa Ecclesia | （サンタエケレシャ） |
| 上ちん | 1 | Joachim | （ジョウチン） |
| 前痴謦 | 1 | gentio | （ゼンチヨ） |
| 伴天連 | 2 | patre | （パアテレ） |
| 満るちれす | 1 | martyres | まるちれす |
| 朗摩 | 2 | Roma | （ロウマ） |

表 12　中国及四国のキリシタンの書簡（「御出世以来千六百二十一年十二月九日）

| 漢字 | 例数 | 原語 | 推定仮名表記 |
|---|---|---|---|
| 常陳 | 2 | Joachim | ジョウチン |
| 伴天連 | 1 | patre | パアテレ |
| 了五 | 1 | Diogo | リャウゴ |

表 13　畿内のキリシタンの書簡（「御出世以来千六百二十一年しやねいろ（一月）の二日）

| 漢字 | 例数 | 原語 | 推定仮名表記 |
|---|---|---|---|
| 阿保須登理賀辨讃 | 2 | Apostolica Bençāo | アホストリカベンサン |
| 貴理志端 | 1 | Christāo | キリシタン |
| 貴理志度 | 3 | Christo | キリシト |
| 恵化連舎 | 2 | Ecclesia | エケレシャ |
| 志門 | 1 | Simon | シモン |
| 上珍 | 2 | Joachim | ジョウチン |
| 場留登路命 | 1 | Bartolomeo | バルトロミャウ |
| 登明 | 1 | Tome | トメイ |
| 如庵 | 2 | João | ジョアン |
| 伴宇路 | 1 | Paulo | パウロ |
| 平登路 | 1 | Petro | ペトロ |
| 理庵 | 1 | Liam | リアン |
| 類子 | 1 | Luis | ルイス |

表 14　長崎のキリシタンの書簡（「元和七年御出世以来千六百二十一年」二月三日、ラテン語文は千六百二十一年三月二十五日）

| 漢字 | 例数 | 推定仮名表記 | 原語 |
|---|---|---|---|
| 安手禮 | 1 | アンデレ | Andre |
| 時庵 | 1 | ジアン | Dião? |
| 寿安 | 3 | ジュアン | Juan |
| 是良仁母 | 1 | ゼラウニモ | Geronimo |
| 登明 | 2 | トメイ | Tome |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 利安 | 1 | リアン | Lião |

表 15　出羽奥州のキリシタンの書簡（元和七年八月十四日、ラテン語文は千六百二十一年九月二十九日）

| 漢字 | 例数 | 仮名（推定） | 例数 | 原語 |
|---|---|---|---|---|
| 貴理師旦 | 1 | （キリシタン） | | Christam |
| 恵化禮闍 | 1 | ゑけれしや | 1 | Ecclesia |
| 寿庵 | 3 | （ジュアン） | | Juan |
| 伴宇路 | 1 | パウロ | | Paulo |
| 理庵 | 1 | リアン | 3 | Lião |

以上、漢字本語は国字版本には出てこず、写本の教義書と書簡にしか存在しないことが分かった。

書簡における漢字本語の殆どが日本人の洗礼名であるのに対して、本稿三・1にあげた教義書では神学に関する概念も出てくることが分かる。

表２の「日本語版」の漢字本語を、他の教義書・書簡のものと比べると、単語の種類や漢字がもっとも多く共通するのは、明らかに教義書である。教義書のなかでも、成立が「日本語版」よりも数年前と推定されている「日本のカテキスモ」の和訳の断片がもっとも近い状況を呈している。後のものとされる「丸血留の道」には「前痴与」、「需天与」などの共通形も出るが、異なった表記法も多く出てくる。

「日本のカテキスモ」のような教義書は現在残っていないが、キリシタンの書簡によると、1580（天正八）年以前にもあったらしい(9)。「日本語版」の漢字表記はこの流れにあると考えられる。時代が下るとともに、ある程度定まっていた形に揺れが生じ、表記が原語における発音から離れていくようであるが、漢字表記は日本人のキリシタン社会で流通した写本の国字資料に出てくる現象であることは確かである。

## 四．表記に用いられる漢字の表意性について

### 四・1　縁天治面度（エンテンヂメント）

「縁天治面度」の語義は「理性」、「分別」である。「「講義要綱」の成立につ

いて」（p.1）で言及したように、「日本語版」の第二編（日 2）は、トマス・アクィナス注のアリストテレスの著作「De　Anima」を基にしている。アリストテレスの「De　Anima」では、アニマ（霊魂）を三分して、その中で死後生き残るのは、肉体とは異なりデウスと同質の「アニマ・ラシヨナル」（ラ・ポ共通、理性に関する魂）のみとされた。そのアニマの主な機能としては「エンテンヂメント」（理解、分別）と「ヲンタアデ」（意志）がある。この中でエンテンヂメントは、天上にいる神（デウス）に縁（よ）って面々の人間の精神的活動を治める機能をもつ。用いられた漢字は、この両面がうまくとらえられていると認められる。

四・2　前痴与（ゼンチヨ）

「前痴与」（gentio　ポ）は「異教徒」の意味であるが、「未開の人民」という意味でも用いられる。

例：未ダヒイデスノ光ヲモ受ケズ、又ヒロソヒヤノ学問ヲモセザル前痴与ナリトモ…（「日本語版」72 オ）

アリストウテレス前痴与ナレバヒイデスノことヲ知ラザルガユヘニ…（「日本語版」77 ウ）

Jxo ハクルスニ掛リ玉フミステリヨハ前痴与ノ前ニハ愚痴、需――ノ前ニハエスカンダロ也。（同 76 ウ、「需――」は「需天与」、ユダヤ人）

Mata Sibylas toyŭ jen nhonin tachi mo goxuxxe no maye ni Gentio no naca naredomo, gotçugue uo cŏmurite canete yori corera no gui uo cacaretaru nari（又シビラスと云ふ善女人達も御出世の前にゼンチヨの中なれども、御告げを蒙りてかねてよりこれらの儀を書かれたる也。「ヒイデスの導師」198 頁）

つまり、「ぜんちよ」が用いられる文脈や意味から考えると、「前痴」という最初の二字が持つ示唆性が認められる。

四・3　恵実土（エジット）

「恵実土」（国名エジプト）が「日本語版」に出てくるのは数丁のみである。それは、聖書の成立についての記述の部分においてであるが、【恵化――】は

見せけちで、下に「恵実土」と書いてある。

トロメエヨト申ス【恵化——】恵実上ノ帝王（102 オ）

エジプト王プトロマヨス（Ptolomaios）はアラビア人がローマ帝国にあったエジプトを征服する以前の国王で、その頃はエジプトにおけるキリスト教が隆盛期を迎えた時代であると言われる。「サントスの御作業」にも十数カ所に「エジプト」という国名が出てきて、また同時代のエジプトについて「ヒイデスの導師」にも二頁に及ぶ記述がある。

Mata Egypto no cuni no dŏxinja no sata uo suru ni, arui ua jichŭ ni ai atçumatte y tamŏ fito mo ari: aruiua jinrin fanaretaru yama no vocu ni y tamŏ fito mo ari: corera no fito no xocu ua conomi, cusa no mi nari (...)sumãnin no dŏxinja uo mireba, tocoro niyotte ua xẽnin, nixẽnin mata ua goxennin mo maximaxexiga, core mina tçucasa ichinin ni xitagauaruru nari.（又エジプトの国の道心者の沙汰をするに、或は地中に相集まって居給ふ人もあり。或は人倫離れたる山の奥に居給ふ人もあり。これらの人の食は木の実、草の実なり。（中略）数万人の道心者を見れば、ところによっては千人、二千人または五千人もましませしが、これみな司一人に随はるる也。「ヒイデスの導師」、203~204 頁）

同書の 204 頁で、上記の文章は聖アウグスチノの記述とされるので、紀元後 4 世紀の時代を指すであろう。キリシタン時代にアラビア圏内にあった大国エジプトに、昔、多くの信心深いキリスト教徒がいたことをたたえている。異教徒をキリスト教徒にすることが日本における宣教師の目的であった。多くの資料、特に書簡などで、キリスト信者に転宗した者を「fruto」（ポ、実り）という語で指し示していた。つまり、「日本語版」に用いられた漢字は、このような実り（転宗者）に恵まれた土地のエジプトのイメージに適していると言えよう。

他の漢字表記（「波羅王」など）に関しても、表意性を論じる余地があるかもしれないが、すべての漢字表記本語に表意性があるとはいえない。

## 五.「日本語版」における漢字本語の分布について

表 16 では、漢字本語が用いられる概念を集め、それぞれがどのような性格の語であるのか、キリスト教のどのような典籍に用いられる言葉であるのかを

「属性」の欄に、それらの語が出現する場所を「漢字表記で出てくる範囲」に、他の表記で出現するかどうか、出現する場合にはその例数を「他の表記の例数」に、他表記がどこに出てくるのかを「他の表記で出てくる範囲」に、最後の欄には拙稿「「講義要綱」の成立について」(p.2) で行った部分け (日第二編 (A) (1 オ~56 ウ), 日第二編 (B) (61 オ~72 オ)、日第三編 (73 オ~365 オ)) のどの分に現れるかを示した。表記の簡略さのため、「日第二編」を「日2」、「日第三編」を「日3」と略し、「オ」を「r」、「ウ」を「v」と略すことにする。

表 16

| 番号 | 漢字 | 属性 | 漢字の例数 | 漢字表記で出てくる範囲 | 他の表記の例数 | 他の表記で出てくる範囲 | 出てくる部 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 波羅王 | 旧約聖書 | 1 | 23v (1 例) | / | / | 日 2 |
| 2 | 需天阿 | 旧約聖書 | 1 | 103v (1 例) | / | / | 日 3 |
| 3 | 朗广那 | 一般 | 1 | 95v (1 例) | 6 | 95v~143r | 日 3 |
| 4 | 野恵 | 旧約聖書 | 1 | 202r (1 例) | 1 | 249v | 日 3 |
| 5 | 李案 | 一般 | 2 | 126r (2 例) | 4 | 105r~125v | 日 3 |
| 6 | 伊留満 | 一般 | 2 | 73r (2 例) | / | / | 日 3 |
| 7 | 伴天連 | 一般 | 3 | 73r | 140 | 85v*~331r | 日 3 |
| 8 | 如誓夫 | 旧約聖書 | 3 | 93v~ 98r | / | / | 日 3 |
| 9 | 阿馬蘭 | 旧約聖書 | 6 | 76v~83v | 22 | 76v~273v | 日 3 |
| 10 | 闍香部 | 旧約聖書 | 4 | 201r~206r | 2 | 199v, 363r | 日 3 |
| 11 | 羅志与那留 | 神学 | 8 | 3r~30v | 102 | 2v~261r | 日 2,2B, 3 |
| 12 | 縁天治面度 | 神学 | 111 | 28r~43v | 79 | 4v~347v | 日 2,2B, 3 |
| 13 | 阿尓广 | 神学 | 125 | 3r~56v | 515 | 1r~345v | 日 2,2B, 3 |
| 14 | 阿檀 | 旧約聖書 | 6 | 028v~115v | 134 | 80v~285r | 日 2, 3 |
| 15 | 汁駄子 | 福音書 | 11 | 115r~206v | 2 | 219r, 220v | 日 3 |
| 16 | 恵実土 | 旧約聖書 | 8 | 102r~218v | / | / | 日 3 |
| 17 | 朗广 | 一般 | 14 | 64v~281v | / | / | 日 2B, 3 |
| 18 | 是婁座連 | 福音書 | 8 | 83r~289v | 4 | 103r~288v | 日 3 |
| 19 | 恵化連闍 | 一般 | 427 | 73r~289v | 33 | 95v~346r | 日 3 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 20 | 梅是子 | 旧約聖書 | 20 | 95v~293r | / | / | 日 3 |
| 21 | 前痴与 | 一般 | 102 | 71v~331v | 2 | 69v, 81r | 日 2B,3 |
| 22 | 需天与 | 旧約聖書 | 72 | 74r~338r | / | / | 日 3 |
| 23 | 安如 | 福音書 | 203 | 47r~341v | / | / | 日 2,2B, 3 |
| 24 | 悟朗利阿 | 福音書 | 92 | 53r~355v | / | / | 日 2, 3 |

*は合字の例。

表 16 の漢字本語がそれぞれの部にどのように出てくるかを見ると、日２、日２Ｂ、日３にわたって漢字もしくは仮名表記例がある本語は第 23 項目「安如」と第 11~13 項目の神学用語だけである。日２、日２Ｂ、日３の内、二部に出てくる概念には「阿檀」、「悟朗利阿」、「朗广」、「前痴与」がある。(「アダン」、「悟朗利阿」の例は日２Ｂになく、残りの２語は日２には出てこない)。

すべての部に出てくる４語のうち、第 23 項目「安如」はどこでも同じ表記である。残りの３語は、神学の概念である。これらについて考える。

漢字本語の分布をもう一回見ると、およそ三つに分けることができる。

（ア）漢字表記の例が限られた丁数の間（5 丁以下）に集中しているもの（1 ～ 10)。

（イ）漢字表記の例が幅広く散在しているもの（14 ～ 24)。これらの項目は大体例数が多く、そして漢字表記の例数が仮名表記のものより多い点も共通している。

（ウ）11 ～ 13 の神学用語。これらの用語も、出てくる例数が、漢字・仮名のいずれかの表記で全書に多くの例が存在し、漢字で表記されている丁数も（ア）ほど少なくはない。しかし、漢字表記の例が見られる範囲が、日 2 に限られている。

漢字表記をすることは、筆記がより丁寧になされていることと関係がある。しかし、これらの表記を選んだのはおそらく現存版の書写者ではないだろう。拙稿「「講義要綱」の成立について」(p.17) でも指摘したように、現存版の書写者はほとんど原語の知識がなく、単に厳密に書写しただけらしいからである。

（ア）の例を見ると、中には一般的な教義書の用語「伊留満」と「伴天連」があるが、これらは 73 オにしか出てこない。「伊留満」という概念は他に出てこないが、「伴天連」は、該当する Pe という合字となって頻出する。

拙稿「「講義要綱」の成立について」（p.11）で、日本語文の筆跡について述べた時、73 オ～ 84 オの部分では筆跡が他の種類と異なって、書写者もしくは筆記道具が違う可能性があることを指摘した。84 オが途中まで書かれてあって、85 オにその内容がより丁寧な字で書かれていることから、この 73 オ～ 84 オの部分だけは別の筆記者によって記された可能性が高い。73 ウなど、場所によって字形が非常に稚拙なところがあることから、外国人の筆跡の可能性も考えられる。「日本語版」の前置きをあげる。

> 日域ノ伊留満衆ニ対シテ大智廣覧ノ師範、日本のビセポロビンシアル伴天連ペロ・ガウメズ編立玉フ Catholicæ　Veritatis ノ Compendio ヲ伴天連ペロ・ラモン日域ノ辞（ことば）ニ翻訳シ終（おわんぬ）。（73 オ）

ここに使われる「伴天連」と「伊留満」は、他には同じ 73 オに一回ずつ出てくるだけである。つまり、「伴天連」がここだけ漢字で書かれ、他の場所では合字で表記されているのは、筆記者が異なることによるのかもしれない。

表 16 の残りの例については、ほとんどが旧約聖書と福音書に出てくる固有名詞と一般名詞である。「日本語版」全体に数例しかない 1 ～ 5 の用語でさえ漢字表記されていることは興味深いもので、これらを漢字で表記した筆記者はこれらの表記を特に意識していたように考えられる。あるいは、この筆記者は、漢字本語が存在した、旧約聖書・福音書の国字和訳本を参考にしていたかもしれない。

## 六．終わりに

以上、「日本語版」を中心として、漢字で表記されている本語を分析してきた。

漢字本語は国字版本には見られず、国字写本にしか出てこない。用いられた漢字からみると、「日本語版」の漢字本語は、教義書に通ずるものの方が書簡に通ずるものより多い。

第五章で考察したように、漢字本語は、キリシタン時代の早い時期に、日本人のキリシタン信者の間で作られたものであって、筆記者が文章を丁寧に書き記そうとする一つの表れであろうと指摘した。ただし、これだけでは、筆記する労力が大きい漢字が楽な仮名よりも用いられていることが、十分に説明でき

ないため、最後に漢字表記の存在意義を考える。

漢字本語の大部分（表1の 24 種類中、15 種類）が旧約聖書・福音書に出てくるものであることから、漢字表記を選んだ筆記者が国字本の聖書のような文献にふれたことがあると考えられる。しかし、キリスト教の最大の根拠となるもの聖書は、カトリックにおいて「神の言葉」として扱われ、内容が厳密に規定され、カトリック圏内ではラテン語の「ヴルガータ」（一般民用の）しか認められず、ポルトガル語やスペイン語などに訳された聖書はない。ちなみに、プロテスタントの国々が異教徒の国とされていた理由の一つが、俗語の聖書を用いていたことである。そのため、日本のキリスト宣教師がこの鉄則に違反することは考えにくい。

しかしながら、聖書自体は翻訳が許されていなかったが、ミサで神父が説教に用いる聖書の場面を集めた文集はあった。現存しているものとしては、例えば、1591（天正一九）年成立のバレト写本の前半がこのような文集である。バレト写本の典拠に国字本があっただろうということはすでに通説であるが、そうすると、バレト写本前半の典拠は、旧約聖書や福音書の場面を集めたこのような文集であったに違いない。このような国字の文書は現存していないが、おそらく「講義要綱」や本稿三・1でみてきた「日本のカテキスモ」などの国字本に類似した表記法が用いられただろうと思われる。また、このような文集は神父それぞれが日常のミサに使うもので、キリシタン時代の早い時期から存在しており、「講義要綱」や「日本のカテキスモ」などの高度な教義書よりも幅広く出回っていたであろう。つまり、ある程度広い範囲の信者に親しまれており、ある種の規範性があっただろうと考えられる。

本稿 p.7 ～ 8 でみたように、漢字本語は、聖書に関係しているものが他の表記で示される例が少ないか全くなく、神学書や一般書に関係するものに仮名表記などが混在していることがわかった。それを併せて考えると、「講義要綱」において漢字で表されることしかない本語は、聖書の場面の文集にあった語をもととしているため、漢字で書く方が仮名で書くより労力が必要であるのにも関わらず、このような聖書の場面の文集による規範に従って漢字で表記されている。漢字表記とともに、仮名と合字の表記例が混在する本語は、既存の教義書に準じて漢字で表されているが、これらの認識度が低くさほど規範性がないため、より書きやすい仮名で筆記する場合が出てくる。このように考えると、漢字表記の存在意義が説明できる。

〈注〉

(1)「「講義要綱」の成立について」、国語国文、第七一巻第十号、p.8.

(2)「「講義要綱」における仮名書き本語について」、国語国文、第七二巻第六号、p.16.

(3) 同上、p.10.

(4)「CATECHISMVS CHRISTIANAE FIDEI, IN QVO VERITAS nostra religionis ostenditur, & sectae Iaponenses confutatur, editus a' Patre Alexandro Valignano Societatis IESV」Olyssipone, excudebat Antonius Riberius, 1586.上記の表題紙の写真が海老沢有道、松田毅一「屏風文書の研究」に掲載されている。

(5) 海老沢有道、松田毅一「屏風文書の研究」ナツメ社、東京、1963, p.47.

(6) 海老沢有道、H.チースリク、土井忠生、大塚光信「キリシタン書・排耶書」、日本思想体系25、岩波書店、東京、1970、六四四+10頁、p. 六二四.

(7) 海老沢有道、H.チースリク、土井忠生、大塚光信「キリシタン書・排耶書」、日本思想体系25、岩波書店、東京、1970、p.五六六.

(8) 村上直二郎「キリシタン研究の回顧」『キリシタン研究第一輯』吉川弘文館刊、東京、昭和51、p.17.

(9) 松田毅一「西洋との出会」大阪書籍、大阪、1982年、下巻、p.144.

(ポペスク フロリン・博士後期課程単位取得退学)